

序文

新たな器具・器材が次々に上市されるなか、またさまざまな治療法が考案され、さらにはそれらを裏付ける多くの研究が進められるなど、臨産学のためめぬ努力によって長足の進歩を遂げている歯科医療。その証左の一つとして、2016年の歯科疾患実態調査では、8020を達成した割合が51.2%と、前回調査から大きく数字を伸ばしたことが挙げられます。

そのような歯科医療の進歩をもってしても、容易に対応できないことはまだまだ多くあり、歯内療法もその一つです。“歯内療法の三種の神器”と呼ばれる「歯科用コーンビームCT」、「マイクロスコープ」、そして「ニッケルチタン製ロータリーファイル」を駆使することで、歯内療法の成功率が格段に向上するようになったのは、大きな福音といえるかもしれません。しかしながら、それらを使いこなすには相応のトレーニングと経験が必要であり、さらにそれらすべてを導入するには莫大なコストがかかるなど、広く標準化されるまでにはまだまだ多くのハードルがあります。

では、歯内療法はそれら三種の神器を揃えなければ、治療の成功率が高まらないのでしょうか。

いつの世も、基本を疎かにせず、一歩ずつ着実に歩み続けた者だけがさらなる高みに到達できます。歯内療法も同様で、あらゆる手技や知識を一つ一つ基本からしっかり積み重ねた先に、その成功率を高める道が開けるものと思われれます。

そこで、当社では歯内療法を成功に導くための基本を5つにカテゴリ化した「マストオブ・エンドドンティクス」シリーズを刊行します。その第一弾が本書『マストオブ・イニシャルトリートメント』です。

当然ながら、抜髄処置などのイニシャルトリートメントが成功すれば、リトリートメントの頻度は低くなります。しかしながら、わが国ではリトリートメントの頻度が高く、それには少なからず保険診療が影響している可能性も否めません。保険診療がよいか、自由診療がよいかの議論はさておき、「患者のためによりよい治療を提供したい」という原点に、いま一度立ち返る必要があるのかもしれません。とくに歯内療法においては、感染症を取り扱っているという意識を高め、歯科医療人としての矜持として、無菌的処置などへの投資を惜しまない姿勢が求められています。そして、そのような見地で日々の診療に臨めば、投資は患者のみならず、術者にとっても大きなプラスとなるに違いありません。

本書ならびに本シリーズが、多くの歯科医師、そして患者の一助となれば幸いです。

2018年8月

デンタルダイヤモンド社編集部 書籍編集課